泉鏡花 「峰茶屋心中」 雑誌『新小説』大正6年（1917年）4月号

1

「山のあの一軒茶屋の屏風の裡に、私の生命、私の魂、私の戀が入つて隠れて居たのです、と申して可いのでございます。」

此の話をした、松山樫吉（けんきち）は年紀（とし）三十一で、鐵道管理局の局員である。　神戸の驛に任に就いて間もなかつた……数へて一昨々年、大正三年四月二十一日、此の日、思ひも懸けず午後から摩耶颪（おろし）の凄い暴風雨のあつた事は、今も土地の人々は覚えて居よう。——　朝は麗（うらら）かな天気で、宥大師（よいだいし）と稱（とな）へる、あくる二十二日が弘法大師の縁日に當る ——　前日、丁度日曜であつた。

樫吉（けんきち）は、當日（とうじつ）機會（きかい）を得て、武庫郡（むこぐん）摩耶山の夫人堂（ぶにんどう）に詣（もう）でた。……苟且（かりそめ）の登山ながら、それが、積年の希望であつた宿願を果すのであるから、唯（ただ）心ばかりと雖（いえど）も、精進潔齋（しょうじんけっさい）をした、決して浮いた遊山ではなかつたのである。

花曇りもせず、春闌（たけなは）に、朝は輝いた。が、唯（ただ）軽い、根の無い風が、何となく、ものを動かすやうに吹いて居た。それが、やがて震動する大風大雨の前驅（ぜんく）であつた。

支度して下宿を出て、いで、摩耶山の麓に着いたまでは、風やや吹添（ふきそ）ひたるのみ。晩春（ばんしゅん）には珍しいまで空の晴渡つたのが、いざいざ昇（のぼり）を仰ぐや、頂（いただき）は翠（みどり）の中の遅櫻、はや見参（みまい）らす姿の峰に朦朧（もうろう）たる峰（みね）が重り、陰気な山の影が添ひ、峰に峰、山に山が重つて、譬（たと）へば中空の龍宮を海坊主（うみぼうず）の遮（さえぎ）るが如く見えたのは、怪しき雲の擧動（ふるまい）である。

日影は次第に……次第に……それが、見る見るうちに、忽（たちま）ち足許まで黒く成つた。さしかかつて、此の邊（あはり）は樹立（こだち）もないのに、枝葉に包まれたやうな暗さである。

暫時（しばらく）、風死し、寂（しん）として、まだ一粒ぽつりとも來ぬ。

雖然（けれども）雨の如く繁く、風の如く慌ただしなかつたのは、峰よりして、頂よりして捲落（まきおと）す、下山の衆の足取であつた。

振（ふり）も、姿も、男、女、老（おい）たる少（わか）き、褄（つま）を引上げ、手に木履（ぽつくり）、とぼけて羽織を裏返しなんどして。……日傘を擔（かつ）いだ商人も、賣（うり）ものの玩具（おもちや）を背負つたのも、其の中を遁（に）げるが如し。

峰をばさして行くものは、時に、唯一人、樫吉影を伴ひぬ。

おもしろいぞえ、京へ參（まひ）る道は、
上る衆もある、下向（げこう）もある……

彼の故郷にて、これは信徒が本願寺（ほんがんじ）へ詣（まう）づる道中の小唄である。聞いた小唄は、松並木を、驛路（うまやじ）を、絡繹（らくえき）とした上下の衆を長閑（のどかに）に楽しく思はせる。こゝに見るのは慌（あわ）ただしさと、氣立（けた）たましさと、憂慮（きづかわ）しさと、そして物凄い雲であつた。

誰も、しかし老婆心があつて、彼の登攀（とうはん）を留（とど）むるものとしては一人もなかつた。柄（がら）にもこそよれ、電信工夫が綱線（はりがね）を傳（つわ）はつて煙突の上へ飛ぶのを見て、やれ少（わか）いもの危い、と喚（わめ）く爺（じい）どの婆様（ばさま）はない。

彼は年紀頃（としごろ）といひ、支度といひ、登山をするには、見た目も屈竟（くっきょう）な壮年（わかもの）で、山から逆落（さかおと）しに襲ひくる暴風雨に追はれて遁（に）げ下るもののために、一騎、防矢射（ふせぎやい）に取つて返す……

樫吉は意氣が昂（あが）つた。

「槍も降れ、雹（へう）も來い、俺は芋（いも）の葉でないから裂けぬ。」

實際、尊く、美しき摩耶山の貴女に、我が年三十にして、はじめて謁見（えっけん）をするのに、鶯（うぐいす）の聲（こえ）、胡蝶（てふ）の風、小鼓（こつづみ）らしい瀧の音、それは餘りに婆娑（しゃば）過ぎる。阿修羅（あしゅら）が障礙（しやうげ）の風太鼓、海坊主が篠（しの）つく雨の槍襖（やりぶすま）。

人は戀しさも、可懐（なつか）しさも、慕（したわ）しさも、最愛（いとし）さも、生命（いのち）を掛くるは幸福である。

此の勇氣を颯爽（さつそう）として相迎（あいむか）へて、淙然（そうぜん）として鳴つたのは、忉利天上寺の雲、霧の途中なる處（ところ）の、名も不動瀧と云ふのであつた。

可（よし）、此處（ここ）へ來ると、既に下界に掃去（はきさ）つたやうに、垢ほどの人の形も見えず。一天恰（いちてんあたかも）も墨を流して、白き瀧壺（たきつぼ）を馳（は）す矢の流れは、やがて呶（ちぬ）らむとする大濁流（だいだくりゅう）の前兆として蒼澄（あおず）むこと稲妻を湛（たた）へたる如く、そして漆（うるし）の如き巖（いは）を砕いて青い飛沫（しぶき）が炎を灌（そそ）いだ。

２

坂は、斯（こ）の不動瀧が境と成つて、――それまでは左右の崖に目立つほどの松一樹もなかつたのが、忽（たちま）ち一徑（いっけい）の曲翫（きょうばん）、屈折（くっせつ）嶮嶸（こうこう）として鬱樹（うつじゅ）密林の下を行く――俗に七曲（ななまがり）と言ふ――樹は天を摩（ま）す大木の杉と、それから栂梅（つがもみ）の常盤（ときわ）の暗闇の繁茂である。樹の根と石と、磽确磊々磽（ぎょうかくらいらい）として嶮けは）しく鋭い。 樫吉の眉は暗く穌（ひそ）でゐた。 やがて、第一陣の摩耶山颪の、密林の梢を驅（か）けて天狗落しに哄（どっ）と通つた……と思つたのは、一呼吸、枝葉の繁りに、烈しい雨を支へたので。とする間もなく大粒がばらゝと落ちて来た。途端に颯（さっ）と一風、石を捲（ま）いて轟（とどろ）と來て、砂を揚げて赤く見えた。風は虚空を渡るのではなく、大地を擦（す）がして飛ぶのである。